

那覇市産数種陸棲貝の *Angiostrongylus cantonensis* の感染状況

柳沢十四男・伊藤洋一(予研寄生虫)・国吉真英(琉球衛研)

T. YANAGISAWA, Y. ITO & S. KUNIYOSHI: *Angiostrongylus*

*infection in some terrestrial snails in Naha*

琉球列島における *A. cantonensis* の存在は西村ら(1964)・Alicata & Nishimura(1965) 国吉・西村(1966)らによつてドブネズミ、クマネズミから本種成虫が発見されて、すでに確認された。しかし本種の間宿主動物の検討は殆どなされていない。筆者らは1968年8月那覇市首里平良町で数種の陸棲貝を採集し、その *Angiostrongylus* 感染の状況を検討する機会を得たので報告する。採集した陸棲貝は、オキナワウスカワ・マイマイ (*Fvuclicola despecta*) 34 個体、アオミオカタニシ (*Leptopoma perlucidum*) 2 個体、オキナワヤマタニシ (*Cyclophorus turgidus*) 10 個体、バンダナマイマイ (*Bradybaena circulus*) 34 個体、アフリカマイマイ (*Achatina fulica*) 35 個体の5種である。小型貝4種は全軟体部の圧平標本の直接検鏡、アフリカマイマイは中腸腺部と頭足部とに分けてペプシン消化を行つてその沈渣を検鏡した。第3期幼虫を得たときはその一部をラットに経口投与して適宜感染ラットの剖検を行つた。雄虫 spicule の計測は *cancera-lucida* と地図距離計を使つて計測した。上記四種の小型貝 *C. turgidus*, *F. despecta*, *L. perlucidum*, *B. circulus* の何れからも本虫の第3期幼虫を発見し得なかつた。 *A. fulica* 35 個体中20 個体(57%)に本虫第3期幼虫の感染を認めた。貝1個体中の感染幼虫数は最少数匹より最高約10,000 匹を越えるものもあつた。上記第3期幼虫はラット感染実験の結果何れも成虫(感染後早期に斃死又は殺した場合には腸より幼虫又は pre adult) となつた。感染後5日、45日のラットより得た雄成虫の spicule を計測し、平均  $1.28 \pm 0.06$  mm を得た。又他の虫体各部の計測値と合せて、本虫が *A. cantonensis* である事が判明した。 *A. fulica* の本虫による高率の感染は、此の他における野鼠の高率の感染を予想せしめるに充分であり、その日本本土との密接な関係を考慮すれば本土への移入は充分考へられる。 *Frueticola* 属及び *Bradybaena* 属のあるものは夫々人工及び自然感染が報告されているが、今回の検査では同一地からの *A. fulica* の高率の感染があるにもかかわらず、その第3期幼虫は発見出来なかつた。

日本寄生虫学 誌第18巻第4号 1969年

第38回日本寄生虫学会記事特集